

別の享楽

六八年以後ラカンは、享楽 (jouissance) という用語を中心概念として、フロイトの再読によってそれまで築き上げてきた理論の再編成を進めていく。四つのディスクリブル、性別化の式、ポロメオの結び目など、後に数学的・文字による理論の伝達を担うべき「マテーム」と呼び変えられる一連の式を確定し、剩余享楽 (plus-de-jouir)、みせかけ (semblant)、ラング (langue) といった新たな概念の適用を通して、それまで主張してきた対象関係論、言語論と主体論の深化をはかる。その際、プラトンからハイデッガーにいたる哲学の批判的転用への依存から徐々に離れ、また精神分析の科学性を保証しようとされてきた言語学と構造主義のモデルからも明確に距離を取り、形式化が陥る窮地として定義される「不可能」なるレエル (現実界) の科学としての論理学に重心を置くようになっていく。そうし

ジャック・レヴィ

た展開を「切断」として扱えるのかどうかは議論の余地があるとしても、その契機として、言語学をはじめとする人文科学の領域において説得力を失いつつあった「構造」理論への疑問、その構造が「街路に出た」五月革命が結果としてラカンにもたらしたやはり「歴史」は存在しないのだという考え、さらには大学が制度として終焉を迎えたという事実などがあげられるであろう。では、臨床から切り離された「形式化」でしかないという一部から批判されるこのラカンの晩年の理論形成を、享楽という問題提起に焦点を当てながらたどっていくことにしよう。

享樂の場の統一

フロイトの領野に対して、到底それと一体化させることはできないだろうと留保しながらも、自分の領野「ラカンの領野」が提示されつるとすれば、それは享樂の場であるとラカンは六九年のセミナーで宣言している。この用語は、性的満足、欲動の充足、機知を他者に伝えられたときの悦びなどを指す、初期フロイトの「満足」(Befriedigung)についての考察を引き継ぐものであると同時に、後期の「テーマとタブー」で提示された、全ての女を享受する原父殺害の神話によって定められる享樂の禁止、そして、「快感原則の彼岸」における起点であった無意識の発見と同様に重要な発見とラカンが見なす「反復」の概念を含んでいる。すなわち享樂はリミットとしてとらえられるべきものの、決して侵犯によって踏み込む場でもなければ、それによって獲られる悦びでもない。むしろ、快感原則による均衡を破る原光景、夢のなかで迫ってくる現実界、外傷などと呼ばれる偶然起きる出来事、抵抗を強いながらも誘惑し続けるもの、すなわち反復的にその磁力を押しつける執拗さ(Instance)として現れる。つまり、「快」に対して、享樂は、苦痛を必ずしも伴わないにしても、「不快」でしかあり得ない。享樂の場にフロイトの死の欲動理論を吸収させるラカンの狙いは、あえて言えばフロイトのエロス対タナトスの二元論が含む矛盾の解消でもあると言えよう。

フロイトにとっては、享樂はファルスに由来する、禁止としてしかあり得ない。享樂を「しあわせ」という言葉に取り替えた場合、それを獲得することは許されない。なぜならば、ファルスは去勢によって身体から切断されているからである。すなわち、みせかけに献身しながら、剰余享樂を求めることによってしか、ファルスを持つ、ないしは「である」という「資格」を享受することしか望めないのである。男の子が女の子に対して自分が男であると確認する過程のなかでは、女の子はファルスであることによって、みせかけを支える真理を保持し、男の子はファルスをもっているというみせかけに常にながみつきながら、実はそれをもっていないという「真理」(それが女の子の握る「真理」である)に常に怯えていなければならない。一方、女の子にとっても、男はファルスとして対象になるのだが、そこにはベニスしかないという事実が目覚めて、彼女は満たされない欲望への欲望に身をゆだねることになる。

そこで、(のちに述べていく全称作用素の否定の結果として)「性はある」という精神分析理論の前提となる仮説を立てたとき、身体そのものの享樂、性的享樂のレエルをどのように考えればよいのかという問いが浮かび上がってくる。そのように逸らされた性のレエルは「性的関係は存在しない」という名を与えられることになるのだが、まずはラカンにおける不可能の概念を検討することからはじめよう。

不可能の条件

ソシユールから転用されたラカンのアルゴリズムが示すのは主体に課される一つの分割線の存在である。そのため、主体は話しながら自身が何を言っているのかを知らない。転じて、何を言っているのかを知ることの不可能に迫るのが精神分析の目的となる。また、この分割線は主体にとって、シニフィエに対するシニフィアの優位性、すなわち意味作用によって尽くされることも飽和されることもない他者性として存在する。この分割線は越えることのできない、意味作用に抵抗する境として機能し、語と物、男と女、個人と世界といった不可能なる関係を表すのだが、それは、単に指向対象に到達することが出来ないということの意味するのではなく、その対象の概念としてのシニフィエに至ること、すなわち完全なる意味作用の成立そのものの不可能性である。その不可能性がフロイトにおいてファルスという名を得るのだが、それをシニフィアの宝庫（大文字の他者）において欠けているシニフィアのシニフィアンであると早まって結論づけてはならない。むしろ、ファルスはシニフィエの欠如という「言存在（parole）」の条件となる意味作用そのものを指す、唯一シニフィエを持たない、分割線を乗り越える飛躍のシニフィアンとされる。したがって、それは「一者」の識別を条件とする象徴界の成立の可能性を与えたと同時に、みせかけ という宿命を主体にとって避けられ

ないものにする。そうした意味では、「父の名」もまた、父性の隠喩として、みせかけ＝ファルスである。つまり、ファルスという障壁を飛躍して、シニフィアンは常に隠喩として働く。したがって、父が隠喩であるというのはメタファーでは決していない（それに対して、欲望の原因、剰余享楽の対象が、シニフィアンの横滑り、つまり換喩を強いる）。

なお、このファルスの作用によって成立する「一」なるシニフィアンは反復と享楽の起点となる「一なる印」、文字という沈殿物をもたらす。つまり「書かれぬことをやめる」偶然（contingence）の契機となるのだ（シニフィアンとシニフィエの関係は恣意的であると見なすソシユールを批判して、偶然であると定義する方がよいとラカンは言う）。そして、シニフィアンは非同一的であるのに対して文字は自己同一的であるが故に、無意識は文字によってレエルとの関わり、分析（解釈）においては「読む」対象でなくてはならない。そこから、無意識の「知」であるシニフィアンの連鎖によって強いられる反復とその享楽は二つの「側」に分かれる。一方では、必然性としての、「書かれることをやめない」意味、症状、書字（écri）。他方では、不可能性としての、「書かれぬことをやめない」、いわば従来の意味を逆行する大文字の他者の享楽と性関係の不在という名のレエル。

享楽の調整としての言説

精神分析が分析するのは主体とシニフィアンの関係であり、この二項を定義するのは「シニフィアンはもう一つのシニフィアンに対して主体を代理表象する」という公理である。その従来の公理から、ヘーゲルの「主人と奴隷の弁証論」の読解を通して、一なるシニフィアンは主人のシニフィアン S_1 、他なるシニフィアン S_2 を 主人がいわば奴隷から奪い取る 「知」のシニフィアンとして再定義する。そして、後に みせかけの場となる動作主の場を占める主人のシニフィアン S_1 の分割線の下に、真理の場として、斜線の引かれた、分割された無意識の主体 α が下敷きにされる。さらに、向かい側の、後には 享楽の場となる大文字の他者の場の「知」のシニフィアン S_2 の下には、喪失、生産、剰余享楽 として対象 a が置かれる（もとは、欲動がぐるぐる、乳房、糞便、まなざし、声といった身体から切り離された、失われた特権的对象であるが故に、 a 自体は対象ではなく、あくまでも欲望、すなわち 剰余享楽 によるシニフィアンの横滑り、メトニミーの原因となる）。こうして哲学の言説でもある主人の言説の構造が提示されるのだが、それぞれの基礎的「文字」 S_1 、 S_2 、 α を左から右へとそれぞれの場合へずらしていくことによって、他の三つの言説の配置が次の順でえられる：ヒステリー者、分析家、大学。その都度、各自の文字は最初占めていた場を持つ特徴を、ある程度保ち続

ける。たとえば、 S_1 は みせかけ、 S_2 は 享楽、 α は 真理、 a は 剰余享楽 の性格を常に表すことになる。それぞれの場との関係は合計五つの矢印によって定式化されるが、唯一、生産の場と真理の間は結ばれることはない。そこでの空白は、不可能性として、関係を妨げる。ただし、主体の構成と同時に、政治的な従属の一般的な形態を説明する主人の言説の現代表、すなわち資本家の言説になるとその不可能性がかわされる：主人の言説の左側の割線がひっくり返され、真理の α が上に、「見せかけ」の S_1 が下に移ることによって、いわゆる「消費社会」の原則である完全な循環性が成り立つ。

ラカンにとって、言説とは言語コミュニケーションによって特定の社会的絆の形式（すなわち想像界の鏡像と幻想の式によって形成される「現実」）を調整するものである。従って、この四つの言説理論は様々な社会的現象の解明に適用されうるであろうし、また、その都度その有効性も問われるであろう。しかし、反哲学の構えで練り上げられたこの理論においてもっとも肝腎なのは、精神分析家の社会的立場と、享楽 に対して言説がどのように働くのかを明瞭化して行くことという狙いである。

言説とは、享楽 の姉妹である真理を覆い隠す動作主が相手の 享楽 から 剰余享楽 を採取する構造であるかぎり、みせかけ に由来するものでしかありえない。したがって、問題は、どのように、大文字の他者の他者も、メタ言語も存在

しないという条件のなかで、レエルをめざすとされる真理の原理に背かない言説が想定されるのかということになる。分析家は、相手となる主体（被分析者）の欲望の原因である対象として、みせかけの場に立ち、知っていると思定された主体の抜け殻としてレエルの穴の縁を埋める、「不可能」にもっとも近い存在として位置づけられる。その対象としての分析家を支えるのは真理としての無意識の「知」であるが、そこに立ち入るには「解釈」という行為が伴わなければならない。ところが、その行為は一瞬の論理的時間性（焦りの非時間性）のなかで起きるレエルとの遭遇、社会的絆の絶対的解体を強いる出来事であり、容易でもなければ、美化されつる代物でもない。一方、被分析者の側では、自由連想、すなわち「話す」という享樂（「そこは話し、享樂し、何も知ることはない」）を通して「生産」されるのは、剰余享樂として、「書かれないことをやめる」、みせかけのいくつかの主人のシニフィアンにすぎず、他者としての構造の「無意識の知」には及ばない。そこに至る道には「不可能」の刻印が押されている。つまり、性的関係と同様、解釈という行為は想像界、象徴界の両方の域において実行されるものではなく、その両方の域から「出てしまつうからこそ」、「ありえない」（不可能）のであり、またレエルとして「あり」、実存するのだ。そして、そこで、ラカンは性別化の背理を証すことによってそのレエルの不可能性を思考しようとする。

他者なる構造

人は話すことによって、享樂するが、その知に立ち入ることはできず、そのことを知ろうともしない（知への欲望など神話であるとラカンはしばしば主張する）。その立ち入ることのできない知は無意識と呼ばれ、「構造」でもある。ところが、精神分析にとつて唯一の道具である言葉を論じるにあたって、後期のラカンは言語学と別れようとする。分析家は「言語屋」（Linguiste）として言語学者とは異なる対象を選ぶとされ、その対象は、ララング（定冠詞のラと言葉という意味の名詞ララングをつなげた造語）と名付けられる。「母語」の定義に近い意味を持つこの造語は、諸言語の分散という言語のレエル、語学や文法によって規定しきれない同音語、失語やしゃれなどによるあらゆる両義性を含む、常に他者性にさらされる言葉（langue）のレエルを指し示す。なお、言語（langage）はララングについての知による劣作（*simulation*）にすぎないと見直され、その結果、無意識は一つの言語として構造化されている」という従来の公理はやや趣を変えることになる。不定冠詞の *un* と副詞の *comme* はさらに強調され、それまで象徴界の次元と密接に結ばれていたラカンの言語論は、レエルの縁で未だに発見されていない構造の仮説へと、いわば異質化していく。最終的には、言葉のすみかには、均質的に、現実界（レエル）、象徴界、想像界という三つ想定の間からなるポロメオの結び目

よって表象されるのだが、これらの展開によって分析家の言表行為(すなわちディスクール、ないしディールdie)は「半は言つ」(mi-dire)ことであること貫して主張される。つまり、無意識の形成が顕在化させるものの潜在的意味を「読む」というフロイトの方法は、語れることと語れないことを分けるポスターに立ち、「語れない」ことをあえて言つ、正しく言うことであると認識されるのだ。

ジャン・クロード・ミルネルが指摘するように、「超言語は存在しない」というラカンの命題は、言葉が自己について語ることでできないということを意味しているのではない。そこで否定されているのは、言葉が自己について語るときに実際に自己の外部に出なければならぬという必然性である。「特定の言語のなかにとどまりながら、その言語について有効に語るのは不可能である」といった一般的命題に反して、ラカンは言葉から出ることできない、言葉はその言葉によってしか語る事ができないないと考える。すなわち、公的規則に従わない私的言葉があり、それが無意識とその「知」による 享楽 の条件でもあるのだ。神託の場合がそうであるように、常にフィクションの構造によって造られる真理は、謎の形を通して、「を語る」が、あくまで断片的にしか語らない。『テレヴィジオン』の冒頭で、言葉が不足しているため真理の全てを語ることは不可能であるとラカンは言い、真理がレエルに由来するのはまさにこの不可能によっているとつけ足す。つまり、真理は非

全 (pas tout) であり、レエルはそれを語ることの不可能性でありながらも、言葉の外にあるのではない。

六〇年のセミネル「精神分析の倫理」のなかでは、主体の内面のもっとも外部(extime)にある、空洞化されたもの(フロイトの Das Ding、すなわち近親相姦の「もの」が大文字の他者のレエルを示していた。その時点での大文字の他者の 享楽は、欲望の象徴化を通して、昇華を促す対象となりえたそれが、一部でラカン理論を「昇華の倫理」と見なす根拠となつてしまったのだが)。しかし、後期において、「メタ言語は存在しない」、「大文字の他者の他者などいない」、「大文字の他者は主観化されえない」と表現される原理をふまえて、この「言葉の不足」、すなわちS(A)と記される斜線の引かれた大文字の他者のシニフィアンは「非 全」という構造そのものを意味することになる。そして、大文字の他者の 享楽、その他者を象徴する(しかし主観化しない)身体そのものの 享楽 の理論が構成されていく。

このS(A)という文字で表記される大文字の他者、すなわち「構造」の空洞は、従来、言説の みせかけ が生産する 剰余享楽 によって埋められ、主観化されてきた。つまり、ファールスという みせかけ、意味作用(フレーゲの、意味と区別される明示の意味 Bedeutung)のシニフィアンによる 享楽 の禁止と留保が、S(A)とaの「合着」を前提にした小文字の他者による大文字の他者の主観化、幻想化を支え、言存在の

「心理」を形成してきた。そしてその他者が、至高善であれ、神であれ、存在であれ、恋愛の相手であれ、ファルス 享樂に由来する限り、愛の形においても、倒錯と同様に、対象にしか届くことができない。したがって、精神分析の言説において行わなければならないのは a と S (A) の分離であり、それは、要望 (demande) から欲望を、意味作用から意味を、「見せかけ」から真理を、幻想から主体を、現実からレエルを識別することに帰着する(また、あらゆる心理的操作はその逆の行為となる：欲望などない、あるのは要望だけで、意味などない、あるのは意味作用だけだ、レエルなどない、あるのは現実だけだ、等々)。

性はある

フロイトが作り上げる、全ての女性を享受する父の殺害とエディプス・コンプレックスの神話性を脱構築することによって、ラカンは「父の名」の理論を再検討していくのだが、そこではあらためて去勢の優位性と難解さが論じられて行く。そこから、否定・肯定の全称命題と特称命題の分類を覆すピアースの図式を借り、「全ての」という全称記号はその対象の存在を前提とするものではないことをふまえて(つまり、全ての女性を 享樂 するというのは、その女性の存在を一人も必要としない、「全ての」という限量辞の利用にすぎない)、「全て

ではない」、「非 全」(pas tout)と読む、否定の線を冠した全称記号を導入する。

「男」の側では、ファルス関数の作用を受けていない x (死んだ父) が少なくとも一つ存在するために、全ての x (男) がファルス関数の作用を受ける $(\exists x \phi \quad \forall x \psi)$ 。例外が全称の条件であり、それがファルス 享樂 の性質を表す、すなわち禁止されていること (interdit) と語ることの狭間に潜んでいること (inter-dit)。それに対して、「女」の側では、そうした例外が成立しないため、「全て」の女がファルス作用を受けるということはない $(\forall x \phi \quad \exists x \psi)$ 。したがって、そこには普遍的なものはなく、女なるものは存在せず、「非 全」としてしか記すことが出来ない一人一人の女しかない。であるが故に、男側にあるファルスにかかわることもできるが、S (A)、すなわち大文字の他者の 享樂 に踏み入ることも許される(そのもつとも自明な形が神秘体験にあるとラカンは言う)。が、全称記号の対象になれないがゆえに、定冠詞の「the」に斜線が引かれないう限り存在しない女の性と、大文字の他者の 享樂 がこれで特定されると理解するのは、自分が普遍的な存在として、「男」であると思ひこむことや、他の全てと異なる特異な存在としての「女」であると信じ切ること同様、愚かである。「男」も「女」もシニフィアンにすぎず、言存在 は、どちらの生物学的性に属そうとも、どちら側を選ぶことが出来る。重要なのは両側の式を隔てる空白である。その理由は、両側の式が表象するの

が性別化の関係のみであつて、性的関係を書き込むことができないかぎり、隔てる空白の空間によつてしか「性的関係は存在しない」と名付けられた 享樂 のレエルは暗示することが出来ないからである。

結び目

晩年のラカンは、ボロメオの結び目によつて性のレエルの問題に迫つていく。三つの想定、一体性、そして文字(RS)からなる三つの輪が、一つの輪を切り離すと他の二つもはずれてしまうという特性(その特性が結び目自体のレエル、文字がその象徴界、そして輪という表象がその想像界となる)を持つ結び目で表記される。そのレエルとなる結び目自体の中心の空洞穴は、欲望の原因の対象、剰余享樂、みせかけのaによつて占められる。「私が贈呈しようとしているものを君が拒絶するよう要望する」というのは、それはそれではないから(「Je te demande de refuser ce que je t'offre parce que ce n'est pas ça」という文言を)、恋愛論の例証としてラカンは組み立てるのだが、この文言は結び目の例証としても理解される。というのは、ここでは贈呈はS、拒絶はR、要望はI、そしてそれではない「はaに対応しているからである。すなわち、三つの輪からなる結び目は欲望の原因の対象によつてのみ保たれることになる。また、逆に、レエルとの遭遇や真理の効果をおよぼす解釈によつ

て欲望の原因がいれば明かされるたびに、その結び目は分離の脅威にさらされることになる。さらに、「大文字の他者の享樂」は愛の印(signe)ではない」といった言い回しは、愛の言説は欲望の原因の対象aが埋める性関係の不在、その障壁にとどまることしかできず(amourとラカンは綴る)、他者の享樂に立ち入るには無力であることを意味するのだということも明らかであろう。

「意味」、「ファルスの享樂」、「大文字の他者の享樂」といった三つの 享樂 の形はそれぞれ、二つの輪が交わる結び目の縁を次のように囲む 意味はIとS、ファルスの 享樂 はSとR、大文字の他者の 享樂 はRとI。Iは鏡像段階によつて形成される身体、Sはシニフィアンの次元、そしてRは実存に該当するのだが、この配置を言語論に当てはめるとすると、「意味」は想像界による象徴界の体系化、つまり ララング について造られる言語(langage)、ファルス 享樂 はレエルとしての言葉の特異性、つまり ララング の作用によつて変貌する言葉(langue)、大文字の他者の 享樂 は身体そのもの実存としての「不足する言葉」と絶対的他者性 享樂 に実体があるとするれば、それは「それ」であつてはならない、常に別の、「異性」のものでなければならぬ)。つまり言葉のレエルとしての ララング、といったような図式が描き出せるであろう。ただし、そうした構成のそれぞれの要素もまた、ことごとく、三つの想定、一体性そして作用(は結びつける、Sは識別する、

Rは分離する)によって分けられていくため、分散の可能性から逃れられることもなければ、安定することもない。

ファルスの享楽、ないし、みせかけの享楽は言説の意味が維持されるための障壁を築き、その障壁の彼岸に、脱意味(de-sens)にたらず別の享楽の地平が位置していることになる。そうして、「およそ主体なるそのものは、性関係の不在意味の欠如としての不在(abs-sens)に備えるべく、(ファルスである、ないしファルスを持つ、という資格で)ファルス関数のうちへと登録されるのである(「L'Enourdir」)。享楽は、一次的過程として決して回収されることなく、再現不可能なる原初の満足の再来を常に要求することによって、ファルスという意味作用の機能に対して、あらゆる種の同形異義語の場となる。そして、主体を快感原則の彼方に赴かせる享楽を常に命じるの超自我もまた、象徴界の仲裁的な法を保証する自我理想とは異なり、法外な言表の聴覚によって、意味の不在へと主体をさらけ出す。

サントーム

同形異義による分離の脅威を抱える結び目の三つの輪の一体性と識別を保つために、ラカンは四つ目の輪を導入する。それは「症状」と、長らく論ずるのを控えてきた「父の名」である。「症状」は原初の満足の不可能な反復としての享楽に由来

するものであり、人が持つもつともレエルなものであるとラカンは指摘した上で、分析の対象として解読すべきであるもの、果たして完全に解消しうる、または解消すべきものなのであるうかと問い直す。そこで、ジョイスにおいて、書字(écriture)が身体を形を収めるはずの想像界の欠陥を補っていることに目を付け、症状が「おちた」時に残るサントーム(聖人とトマス・アキナスにかけた、sintomeという古い表記)の概念をもつちだす。そのサントームが産み出す「意味」は、言うまでもなく、従来のファルスのみせかけの意味作用によって得られる「意味」に対して逆行し、フィックションの構造としての真理の性質を帯びることになる。つまり、その意味は必然性、書かれることをやめない「主人のシニフィアンと、不可能性の書かれないことをやめない」享楽のレエルを分ける縁に立つことである(が故に、書字はシニフィアンが刻むレエルの享楽として捉えられる)。その一方、ラカンは、「父の名」が、同形異義の分散に陥ってしまう「意味」を、命名、識別を担う機能として、「名の名の名」として、象徴的父性やファルスの享楽の条件となる例外、死んだ父、とは異なるカテゴリーを立て、サントームと同様、文字による「知」とその「意味」の伝達をいかに保証できるのかという課題に取り組んでいく。ところが、最後のラカンは、トラーヌやメビウスの帯、クロス・キャップのトポロジーを継承するこうした結び目の理論を練り上げていくにつれて、徐々に沈黙し始める。あたかも、何

かが「書かれるのをやめた」かのように。分析家の育成を制度的に定めるはずのパスは失敗だった、精神分析の伝達と科学性の根拠づくりも失敗した、そして「私は失敗した」と宣言する。その説明として、ますます臨床から離れた、思弁的な形式化が原因であるとか、または、ラカン本人が嘆いていたように精神分析が単なる災厄でしかなくなってしまったからであるといった安易な見解がしばしば出されている。だが、そうした裁断からは、欲望と 享樂 の問題提起から思考されうる至上の言語論を転覆し、また、六八年五月が顛わにした「潜在性」をもつとも強力に考えようとした思想であるラカンの歩みへ新たに着目することは出来ないであろう。しかし、どれだけ現在の知的状況が「文化への不満」を覆い隠すことに専念してしようと、無意識の声は たとえそれがどれほど低い咳きであるとしても 決して「沈黙」しえないことを知るために、この「書かれるのをやめた」思考へと我々は立ち戻らなければならないのである。